

〔科目名〕 哲学I	〔単位数〕 2単位	〔科目区分〕 教養科目
〔担当者〕 大森 史博 Ohmori Fumihiro	〔オフィス・アワー〕 時間: 授業の初回に提示する 場所: 613 研究室	〔授業の方法〕 講義
〔科目の概要〕 <p>西洋哲学の歴史に登場する著名な哲学者、および主要な概念を厳選してとりあげ、解説し、考察をおこなう。哲学の学説や概念は一見ただけでは難解にも思われるが、その根本にある思考、核心にある問いに目を向けることにより、この学に接近したい。西洋哲学の歴史にあらわれる人物、思想、概念に触れ、自覚的に考えることをとおして、われわれ一人一人が世界を生きることを学びなおすための思考の鍛錬をおこなう。</p> <p>授業において参加者には、自分の思考を可視化するための方法として、ワーキングシートを作成してもらおう。ワーキングシートによる思考の可視化と振り返りが、自身の思考を深めてゆく助けになるはずである。この方法については授業のなかで詳しく説明する。また、大教室でおこなわれる授業では、手をあげて質問することをためらうかもしれないが、自覚的に質問すること、問いを投げかけることを試みて欲しい。質疑応答を実現することができれば、理解も深まり、考えるためのヒントも得られるはずである。</p> <p>基本的には、毎回一つのトピックを読み切りにして、①前回の反復とあらたな問いの提起、②配布資料をふまえた解説、③ワーキングシートの作成、という組み立てを授業のユニットにする。しかし、限られた時間では完結できない場合も多くある。くり返し立ち戻りながら考察をかさね、理解を深めたい。</p>		
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつか〕 <p>哲学は「知を愛する」ということ、つまり、あらゆる事象についてのあくなき探求を意味する。いかにも素朴な知の探求であると思われるとしても、みずから「問い」をもつことが根本にある。この授業が企図するところは、具体的な経験と眼前の事象に即しながら、われわれの学問や知識の深層にある、そうした「問い」を再考することである。</p>		
〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕 <p>中間目標: 西洋哲学の著名な哲学者の思想、主要な概念、核心にある問いを知る。</p> <p>最終目標: 学び覚えた哲学者の思想や概念をふまえ、自らの経験を背景にして、自分の問いを提起することができる。</p>		
〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 <p>ただ知識を身につけるだけでなく、自分で考える取り組みがあること、学んだ内容や自分の考えを可視化できること、等をよい点とするコメントがあった。履修者自身がじっくり考えるという本来の目的が実現できるよう、授業の形式についても、内容についても改善の工夫をかさねていく。問題点として指摘されたこともある。少し話しが複雑で理解が難しい、といった事柄である。事象そのものに即して考えるならば、現実の世界は、ふだん我々が気づかずに、あるいは、あえて見過ごしてきたことも思いのほか多く、複雑である。そうした事柄を学ぶことの意味はなにか。十分な理解を促すことができるよう説明の工夫をしていきたい。大切な論点は、より多くの時間をかけてでも詳しく話さなければならない場合がある。その点は理解して欲しい。一方で、学習内容が過剰になることのないよう注意する。プリントを受け取っていない、マイクの音量を上げて欲しい、といった簡単にすぐ解決できることを我慢したりしないようにして欲しい。広い教室においては、対話を展開してコミュニケーションを深めることは容易ではないとしても、できるかぎり相互的な応答の関係をつくることができるようめざしていく。</p>		
〔教科書〕 使用しない。適宜プリントを配布する。		
〔指定図書〕 なし		

【参考書】

『よくわかる哲学・思想』 納富信留 ほか編著、ミネルヴァ書房、2019年
 『図鑑 世界の哲学者』 サイモン・ブラックバーン 監修、熊野純彦 日本語版監修、東京書籍、2020年
 その他、授業のなかで紹介する。

【前提科目】

前提科目はない。春学期に開講する「哲学Ⅰ」と秋学期に開講する「哲学Ⅱ」は、各々が独立に完結する授業である。どちらを先に履修してもよいし、どちらか一方だけを履修してもよい。

【学修の課題、評価の方法】(テスト、レポート等)

全体の五分の四以上の出席を前提に、次のとおりの割合で評価する。
 レスポンスカード・ワーキングシートの作成、授業内の活動や発言(50%)、期末の課題(50%)

【評価の基準及びスケール】

A:80点以上
 B:80点未満70点以上
 C:70点未満60点以上
 D:60点未満50点以上
 F:50点未満

【教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望】

哲学には独特の難しさがあると思われるかもしれない。しかし、言葉や事柄そのものの難しさを、ひとつひとつ解きほぐしながら考える作業こそが哲学の営みであり、この難しさを楽しむことこそ、哲学への最良のアプローチの仕方だろう。自ら考え、自ら問いをもつことを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。
 授業各回のスケジュールや扱う内容は、参加者の関心や進行状況に応じて変更することがある。

【実務経歴】

該当なし

授業スケジュール	
----------	--

第1回	テーマ(何を学ぶか):イントロダクション、「哲学とは何か」という問い 内 容:この授業の趣旨と進め方、評価の方法、哲学とはどのような学問なのか、問いと答え 教科書・指定図書
第2回	テーマ(何を学ぶか):「哲学の始まり」についての問い 内 容:アルケーの探究、ソクラテス以前の哲学者、ワーキングシートの意味と目的 教科書・指定図書
第3回	テーマ(何を学ぶか):「真理」についての問い 内 容:ソフィストとフィロソフォス、相対主義 教科書・指定図書
第4回	テーマ(何を学ぶか):「存在」についての問い 内 容:パルメニデス、存在と時間、自然学 教科書・指定図書

第5回	<p>テーマ(何を学ぶか):「対話」という方法 内 容: 不知の自覚、ソクラテスの死</p> <p>教科書・指定図書</p>
第6回	<p>テーマ(何を学ぶか):「本質」についての問い 内 容: プラトンの哲学、探究のパラドクスとイデア論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第7回	<p>テーマ(何を学ぶか):「自然」についての問い 内 容: アリストテレスの哲学、理論知と実践知、四原因説、幸福論</p> <p>教科書・指定図書</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか):「汝自身を知れ」という格率 内 容: オイディプス王の伝説、アウグスティヌスの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか):「懐疑」という方法 内 容: 考える私の存在、主観客観の図式、デカルトの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか):「自由」と「必然」についての問い 内 容: 神即自然、スピノザの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか):「なぜ」という問い 内 容: 予定調和、多元論、ライプニッツの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか):「知の源泉」についての問い 内 容: ヒュームの懐疑論、連合説</p> <p>教科書・指定図書</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか):「認識の基礎づけ」についての問い 内 容: コペルニクス的転回、カントの哲学</p> <p>教科書・指定図書</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか):「価値」についての問い 内 容: ニーチェの哲学、永劫回帰</p> <p>教科書・指定図書</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか):「時間」と「存在」についての問い 内 容: 総括と補足</p> <p>教科書・指定図書</p>
試験	